

編集後記：毎日、新型コロナの話題ばかりで、いささか食傷気味かもしれませんが、避けて通るわけにはいきません。少しお付き合いください。

新型コロナは私たちの生活を一変させました。3密を避けるため外出自粛を要請され、テレワークやオンライン会議、オンライン授業が急速に普及してきました。理事会でもオンライン会議が普通になっていますが、実は一足早く、昨年度当初から本格的に導入しています。もちろん、新型コロナの発生を予測したわけではありません。厳しい財政事情の中、少しでも経費削減を図るために行ったのですが、その効果は決して経費削減にとどまりません。3月末の春季大会の会場開催中止の決定もこのオンライン会議でなされるなど、臨機的意思決定にも積極的に活用されています。今年度の秋季大会もオンライン開催となりました。こうしたオンライン活用の動きは気象学会に限らず、単にウィズコロナの一時的なブームではなく、ポストコロナにおいても定着するのではないかと思います。

今のような厳しい状況に置かれると、「ピンチをチャンスに変える」という言葉をよく耳にします。厳しい状況にも前向きに対応しようということでしょうが、皮肉な見方をすれば、人は切羽詰まり土壇場に追

い込まれなければ変わらない、と言っているようにも聞こえます。先ほどの理事会のオンライン会議やその他のさまざまな改革も、その多くは財政危機という切羽詰まった状況に追い込まれたからこそできたもので、平時に先を見越しての改革は簡単ではないでしょう。

今回のコロナ禍で社会の在り様は大きく変わらざるを得ないと思います。映画「山猫」でアラン・ドロンの扮する主人公が「変らずに生き残るためには、変らなければならぬ」と言っています。ただし、とにかく変わればよいというわけではありません。昨今の新型コロナに対する各国の対応を見ると、とかく自国第一主義に陥る傾向にあることは残念です。私たち気象人は「大気に国境はない」ということを日々実感しています。天気予報も気候変動や温暖化対策も、国際協力なくして成り立ちません。守るべきもの、決して変わってはいけぬものは何か、変わるべきものは何で、その方向はどうあるべきか。国や社会、そして気象学会の変わるべき方向性について、注視していきたいと思います。

(瀬上哲秀)